

## 中尾本『おくの細道』の用字特性（結び）

濱 森太郎

本稿は、「中尾本『おくの細道』の用字特性（上）」（下二）  
 『人文論叢』二〇〇二年三月～二〇〇四年三月、三重大学人文学  
 部刊」と書き継がれた考察の「結び」に当たる。

### 一 新しい手段

「芭蕉自筆の「奥の細道」、書き癖の誤字で確認」（一九九六年十一月  
 二十六日、朝日新聞）という新聞の大見出しに始まる中尾本『おくの細  
 道』の真贋論争の争点は、実のところ「書き癖の誤字」ではなかった。  
 この報道の後に生じた長い真贋論争で明らかになったように、問題の焦  
 点は真贋論争で提唱された判定方法に対する疑義であった。巷間には偽  
 筆が溢れ、筆者判定が欠かせないにも関わらず、松尾芭蕉の筆跡判定さ  
 えままならない現状は、危惧すべき事態に相違ない。では「書き癖の誤  
 字」に替わる筆跡判定の手法は有るのか。

この小考で取り扱う「仮名揺らぎ」並びに筆者の用字特性は、空気の  
 ように有り触れた現象だが、書記行為を精細に観察する点では役立つ事  
 が多い。そこでその領域から必要な知見を汲み上げて見ると、芭蕉自筆と  
 称される中尾本『おくの細道』では、用字特性となる異体仮名「春・登・  
 丹・流」が下地本文で急増し、張り紙修正本文では急減している（注し）。  
 「春↓寸・登↓止・丹↓尔・流↓留」と、異体仮名が基本仮名に書き換

えられているのである（本論、上）。そこでその書き換えの原因を探る  
 と、張り紙訂正に取り掛かる中尾本筆者が下地本文の文字を確認し、本  
 文上に張り紙し、その上にもう一度文字を書く過程で否応なく丁寧な書  
 写を心掛けることになった（本論、中）。

次に、同じ用字特性を持ち、筆跡が近似した松尾芭蕉の文書を探すと、  
 元禄六年四月筆「許六離別詞」（『芭蕉全図譜』所収、柿衛文庫蔵）が  
 それに該当した。しかし、そこにも複雑な事実が介在した。柿衛文庫本  
 「許六離別詞」は中尾本『おくの細道』の用字法と一致したが森川許六  
 の手になる癸酉記行版「許六離別詞」並びに韻塞版「許六離別詞」の  
 用字特性とは一致しなかった（本論、下の一）。

この癸酉記行版「許六離別詞」は、同俳文を授与された森川許六がそ  
 れを清書して、備忘用に松尾芭蕉に返贈したもの、また韻塞版「許六  
 離別詞」は同俳文を受領した森川許六がそれを落款まで丁寧に模写して  
 出版したものである。当然、柿衛文庫本（以下、柿衛本）「許六離別詞」  
 が芭蕉自筆ならば、その文字遣いは韻塞版「許六離別詞」に近似するに  
 相違ないが、実はそうではない。ではなぜ、この韻塞版の用字特性は柿  
 衛本「許六離別詞」並びに中尾本『おくの細道』のそれと食い違うのか。

## 二 仮名文字の揺らぎ

中尾本『おくの細道』の地下本文に多出する異体仮名「春・登・丹・流」が、張り紙修正段階では急速に減少する形で出現する「仮名揺らぎ」<sup>〔注〕</sup>は、元禄三・四年筆「幻住庵記」諸本、元禄六年筆「三日月日記」、同年筆『おくのほそ道』諸本にはない。この「仮名揺らぎ」並びに異体仮名遣いの変化は、中尾本筆者の個性と見られる。

ちなみに基本仮名・補助仮名という二種類の仮名の使い分けによって生じるこの「仮名揺らぎ」には、使い分けから生ずる自然な変動の輪郭がある。この仮名文字の使い分けが顕在化する画巻本『野ざらし紀行』（松尾芭蕉作、貞享三年秋成立）を対象に、この両者の使い分けを探ると、文字数はほぼ八〇対二〇の比率で分布する。基本仮名を「下地」、補助仮名（一般には目立ちやすい「異体仮名」が使われる）を「模様」として、適宜、配置する文字遣いから自然に生じる比率である。如上の比率は、テキストの推敲に連れて変化し、『奥の細道』になると次の中尾本・天理本の場合のように基本仮名の比率が増加する。



この仮名文字遣いの変化を手掛かりに「中尾本」の文字遣いを分析すると、地下本文で増加した異体仮名「春・登・丹・流」が貼紙本文で減少し、基本仮名に交替する理由は、張り紙本文の筆者による一時的な気まぐれではない。

この文字遣いの変化の理由は、地下本文の五一四〇字の仮名の中で主として「春・登・丹・流」の使用時に基本仮名・補助仮名の役割分担が緩和され、「春↓寸」「登↓止」「丹↓尔」「流↓留」の四対の文字の間で大幅な書き換えが生じた事にある。この分担解除の原因は「春・登・丹・流」の各仮名字体をもって、一音節語を適宜に装飾表示する地下本文筆者の仮名文字遣いが貼紙本文で抑制されたことによる（本論、上）。

この四種三一〇字の異体仮名さえなければ、「中尾本」と「天理本」との差異は大幅に縮小する。「中尾本」の仮名字体の相違箇所六八五カ所のうち三一〇カ所が消失するからである。しかもそれは事実、「中尾本」の貼り紙修正本文（以下、張り紙本文と略す）ですでにかなりの程度、解消されている。貼り紙本文と「天理本」本文とを比較するなら、その差が僅少であることは一目瞭然なのである（本論、中）。

## 三 仮名文字の揺らぎが収縮する理由

ここで注目すべきは、地下本文を貼り紙で密封しつつ補筆・訂正する途中で仮名文字遣いが順次、シヨアアップ型からマークアップ型に変化する事実である。中尾本筆者は、本文の冒頭から末尾にかけて、また貼り紙訂正作業のはかどりに連れて、順次、文字遣いを変えたのであって、執筆途中で、ある箇所から自覚的に仮名文字遣いを変えたのではない。そうであるならば、用字変化にも目立った境目があるに相違ないが、中

尾本の用字上には境界に当たる一律の用字変化は起きていない（本論、上）。

しかも、この中尾本貼り紙本文に近似し、貼り紙本文成立後に『おくのほそ道』（第二稿）を下敷きにして書写された天理本『おくのほそ道』では、当該四字の異体仮名が希薄である。とすると、中尾本筆者が貼り紙修正時に下敷きにした原本『おくのほそ道』（二稿本、詳しくは後述）は、元来、当該四字の異体仮名を恣意的に多用する中尾本流の仮名文字遣いではなかったことになる。

さらにいわゆる仮名遣いにも明瞭な個性の痕跡がある。中尾本の動詞「きこえ」（全九例）は、終止形三例が「きこゆ（ヤ行活用）」とあり、未然形、連用形五例は「きこへ（ハ行活用）」と書かれている。当時の仮名遣い手引き書『初心仮名遣』（元禄四年刊<sup>注3</sup>）に照らすと、このヤ行活用、ハ行活用の混同は特に珍しくはないが、その活用語尾（「へ」「え」）を「へ」に揃えて書く所に「中尾本」「天理本」の仮名遣いの特徴がある（<sup>注4</sup>）。

ところが、中尾本張り紙上の「きこゆ」を見ると、次の通り未然形、連用形、合計五例のうち、貼り紙上の二例だけは「きこえ」とある。

1. 「中尾本」 の給ひきこえ給ふ<sup>を</sup> （芦野、貼り紙上）  
「天理本」 の給ひきこへ給ふを （芦野）
2. 「中尾本」 ほのぼの聞えて（金沢、貼り紙上）  
「天理本」 ほのぼの聞えて（金沢）

またこの二例のうち、2は下地本文に該当する単語「きこゆ」がないため、張り紙本文の筆者が下地本文の文字を参照した結果「聞へ」を「聞え」と書き直した可能性はない。そしてその「聞え」が「天理本」ではそのまま踏襲されている。ちなみにこの「天理本」では、「きこへ」

と書かれたその他の事例が皆「きこへ<sup>え</sup>」と、本文の筆跡とは別筆で訂正されている。「中尾本」の貼り紙修正、「天理本」の傍書訂正と二度続けて「へ↓え」と修正されるところには、「きこえ」が正規だという訂正者松尾芭蕉の判断が働いている。

次にもう一種の興味深い表記上の個性は、濁音表示の仮名にある。

韻塞版	癸酉記行版	全図譜版
27、ミと者越	↓ミと者を	↓ミと者を
27、ミと者越	↓ミと者を	↓ミと者を
27、ミと者越	↓ミと者を	↓ミと者を
27、ミと者越	↓ミと者を	↓ミと者を

27「ミと者（ことば）」を癸酉記行版で「ミとば」と書く第一の理由は森川許六が中尾本筆者のように「ば」者」と書く書記習慣を持っていないことによる。第二の理由は、汎用仮名の「者」が「許六離別詞」では「は（わ）」と読まれることが考慮されている。そして第三には隣接する語句「ミと者」との重複を回避する意図がある。そこでわざわざ「ば」と濁点を振って正確な読みを確保したのである。

また33の「ミと者越」は、実は「され者このミと者を」という同字反復の文脈で、癸酉記行版は「さればこのミと者を」と書くことで同字反復を回避している。一方、柿衛本は「され者このミと者を」と「ば」を「者（ば）」の文字で揃えている。この「ば」者」という表記の整理意識には、この柿衛本筆者固有の根拠がある。同一筆者の筆によると見られる中尾本『おくの細道』では、濁音「ば」は「ハ8例」「者62例」の比率で書かれている。つまり圧倒的に「者（ば）」を多用する中尾本の筆者なら「され者このミと者を」と反復を構わず文字を統一して可笑しくはないのである。

また次の濁音表記にも似通った事情がある。

韻塞版	癸酉記行版	柿衛本
23、あらず	↓あらず	↓あらず
24、冬扇のとし	↓冬扇の古とし	↓冬扇のこ登し
40、かゝ遣て	↓かゝ遣て	↓かゝ計て
		33

23 「あらず↓あらず春」は基本仮名「寸」を異体仮名「春」に置き換えて助動詞「ず」を表示したもの。24 「冬扇のとし↓冬扇の古とし↓冬扇のこ登し」は、略字の「とし」を正字の「古とし」「こ登し」に書き換えたもの。40 「かゝ遣て↓かゝ計て」は芭蕉愛用の異体仮名「遣」を同じく異体仮名「計」に置き換えたものである。

柿衛本で採用された「寸↓春」の文字変化は、中尾本『おくの細道』の「春」が助動詞「ず」の濁音表記に用いられることに気づくと納得がいく（本論、下）。また24 「冬扇のとし↓冬扇の古とし↓冬扇のこ登し」の場合も、中尾本『おくの細道』では、濁音「こ」の表記（17例）すべて「こ（已）」であり、一方「こ（古）」は「こころ」「こち」など心的な出来事を書く文字に利用されている。同様に濁音「げ（計）」は、中尾本『おくの細道』では、「計5例・氣6例・希2例」で表記され、「遣」が濁音表示に用いられることはない。つまり柿衛本「許六離別詞」による濁音表記の文字遣は、明らかに中尾本『おくの細道』の濁音表記に符合した文字遣いなのである。

ところでこの中尾本を見ると、下地本文と言えども綺麗に清書されている。このため、この清書作業に先立って準備された『奥の細道』（第一稿）があったと推測される。その第一稿をほとんど書写する形で書き

写した時にだけ、中尾本の下地本文（清書本）が出現するのである。したがってこの下地本文が作成された時点で『奥の細道』第一稿は、実は二部生成したことになる。一部がオリジナル、一部が清書本の現、中尾本下地本文である。

その上で松尾芭蕉がさらなる推敲の下敷きとしたのは、オリジナルの『奥の細道』である。現、中尾本下地本文の書き入れ並びに訂正は軽微な上に、張り紙の下地に隠れた本文にもそれほど大きな訂正がないからである。そのオリジナルテキストを用いた本文添削が進んで、中尾本下地本文への張り紙並びに書き込み訂正が始まったとき、中尾本筆者は、下地本文と芭蕉オリジナルの訂正版とを比較、照合することで、否応なく文字を丁寧に書写する立場に立つ。

その過程で中尾本筆者による我流の文字遣いが自然に抑制されたことは、「穀義朴納↓剛穀木納（訥）」「主驗↓修驗」「舍身無常↓捨身無常」「稚兎藪邊↓雉兎藪邊」「方寸を漬↓方寸を責」「神后皇后↓神功后宮」「平永寺↓永平寺」（山本唯一著『奥の細道』自筆本を疑う）『芭蕉の文墨―その真偽―』思文閣出版、8〜10頁）などの、ややうかつな筆運びの修正例によって明らかである。こうして中尾本筆者の我流の文字遣いが抑制されると、当然、天理本のように松尾芭蕉のテキストに元来備わっていた基本仮名重視、本文要所のマークアップを主眼とする仮名文字遣いが顕在化することになる。

#### 四 中尾本『おくの細道』と「許六離別詞」

さて元禄六年五月六日に江戸を出発した森川許六は、五月一五日には自筆卷子本『癸酉記行』の奥付を書いている。この度、彼がこの『癸酉



「記行」の完成を急ぐのは、中仙道の風光を記したこの紀行文を送付して、「椎の花の心にも似よ木曾の旅 芭蕉」と餞別句を詠出した松尾芭蕉の旅懷を温めるためである。と同時に芭蕉庵に引き籠もって結核で病臥する猶子「桃印」の看病に努める松尾芭蕉の緊張を和らげる積もりもあった。

森川許六の江戸出立を間近に控えた元禄六年三月、桃印の病状はすでに森川許六に「いつ頃御見舞共難定候間、左様ニ御意得被成被下候」（同月、許六宛芭蕉書簡）と伝えるほど切迫したものだった。そして明日はいよいよ出発という同年五月四日には「拙者何とうろたへ候やら、与風うつくしう書き出し候而散々見るしく気の毒ニ存候。（中略）御帰国候而御あらため可被下候。書直し可申候。」（元禄六年五月四日付、許六宛芭蕉書簡）と書く始末となる。つまりは餞別の文章は草稿になるので、御帰国の後にご点検の上ご返信下されば、こちらから書き直したものをお届けすると言うのである。そしていよいよ出立の五月六日、松尾芭蕉は、餞の色紙・短冊・画賛の類を「例の次郎兵衛」に託して許六の住まいまで届けた（『韻塞』『其詞』前書<sup>注5</sup>）。

ところで中尾本『おくの細道』と柿衛本「許六離別詞」の文字遣いの近似性に議論の余地は少ない。両者は94%程度の仮名が同じ文字遣いで書かれている。ただし似ているのは、中尾本『おくの細道』と柿衛本「許六離別詞」であって、韻塞版並びに癸酉記行版「許六離別詞」とは異質の文字遣いで書かれている。

この柿衛本「許六離別詞」が韻塞版並びに癸酉記行版「許六離別詞」の下敷きになった芭蕉自筆文書だという推測もあるが<sup>注6</sup>、それは当たらない。

巻末に注記した表<sup>注7</sup>の通り柿衛本「許六離別詞」には、前後の同一語句の文字を揃えた形跡や本文の訂正箇所があるにも関わらず、その訂正

箇所は次の通り、韻塞版、癸酉記行版には反映されていないからである。

- 5、何の為愛すや（柿衛本） ↓ 何・為愛すや（韻塞）
- 6、畫の為愛すと（柿衛本） ↓ 画の為愛・と（韻塞）
- 11、うしなふ事（柿衛本） ↓ うしなふる事（韻塞）

また次の三箇所の柿衛本の傍書修正もまた韻塞版、癸酉記行版には踏襲されていない。（柿衛本 ↓ 韻塞版 ↓ 癸酉記行版の順に並べる。）

- 8、精神妙に入（柿衛本） ↓ 精神徹に入
- 10、ミことはを（柿衛本） ↓ ミことはを
- 12、筆の道に見え（柿衛本） ↓ 筆の道・も見え ↓ 筆の道にも見え

ちなみに次の表四のように韻塞版と柿衛本との仮名の異同箇所を抽出し、その異同箇所を癸酉記行版と照合すると、韻塞版の初稿性がいつそう明瞭になる。

表四 韻塞版「許六離別詞」・柿衛本「許六離別詞」の仮名文字遣いの異同（白地部が差違）

韻塞版		癸酉記行版		柿衛本	
1、かりそめル	↓	かりそめ丹	↓	かりそめ丹	1
2、面越	↓	面越	↓	面遠	1
3、あハセ	↓	あハセ	↓	あ者セ	1
4、深切ル	↓	深切丹	↓	深切丹	2
5、別越	↓	別越	↓	別遠	2
6、おし武	↓	おし無	↓	をし無	3
7、草屏越	↓	草屏越	↓	草屏を	4
8、畫越好ム	↓	画を好む	↓	畫を好	5
9、こ、呂みル	↓	こ、路み丹	↓	こ、呂み丹	6
10、とふ事ある	↓	とふ事有	↓	とふ事有	6
11、好といへ里	↓	好といへ利	↓	好といへ利	7

12、風雅盤	↓風雅盤	8
13、愛・といへ里	↓愛・といへ利	9
14、二にし天	↓二にし亭	10
15、用越	↓用遠	10
16、君子ハ	↓君子盤	11
17、ふた津にし天	↓ふたつにし亭	12
18、可感丹や	↓可感丹や	13
19、書はとつて	↓書はとつて	13
20、風雅ハ	↓風雅盤	14
21、弟子となす	↓弟子とな春	15
22、見流所丹	↓見留所丹	17
23、あらず	↓あらず	18
24、冬扇の古とし	↓冬扇のこ登し	19
25、衆丹さかひて	↓衆丹さかひて	19
26、用る所奈し	↓用る所那し	20
27、と者のミ	↓と者のみ	21
28、かりそ免丹	↓かりそ免丹	21
29、たハふ連	↓た者ふ連	22
30、あハ礼なる	↓あ者連なる	23
31、歌丹實あり	↓歌丹實あり	25
32、そふる止	↓そふる登	26
33、ミことは越	↓ミことはを	27
34、其細起	↓其細き	28
35、一筋越	↓一筋を	28
36、もと女す	↓もと免す	30
37、求た流所	↓求堂る所	30
38、もと女よ止	↓もと女よ登	31
39、筆濃道・も	↓筆の道も	32
40、か、遣て	↓か、計て	33
41、柴門の外耳	↓柴門の外丹	34
42、王か流ゝのミ	↓王か流ゝのみ	34

ここに掲載した両書の文字の異同カ所42例の内、白地部の二五文字で韻塞版・癸酉記行版と柿衛本とが喰い違っている。推敲が進むにつれて基本仮名が増加する松尾芭蕉の文字使用に注目すると、本文の語句・表記は、明らかに韻塞版・癸酉記行版から柿衛本に向かって推敲されている。仮に疑いの目で検証しても、その逆ではない。

そこで次にこの表四の中から韻塞版と癸酉記行版とが一致する部分（白地部）を除くと、柿衛本の表記が癸酉記行版と一致するものが二〇例抽出される（箇所）。この二〇例の一致は、柿衛本が癸酉記行版の後に書かれたものだとする当然の結果になる（表五）。

ただし、その一致ヶ所を点検すると、用例数の割には個性的な差異が少ない。両書の文字が一致する最大の理由は、両書の筆者がともに基本仮名「尔」よりは異体仮名「丹」を多用することにある。おまけにそれは助詞・助動詞（連用形）に利用される「丹」である。ちなみに助詞・助動詞（連用形）に「丹」を用いるのは中尾本『おくの細道』筆者の特徴である（注④）。

表五、柿衛本が癸酉記行版と一致する表記

韻塞版	癸酉記行版	柿衛本
1、かりそめ尔	↓かりそめ丹	↓かりそめ丹
4、深切尔	↓深切丹	↓深切丹
6、おし武	↓おし無	↓おし無
9、こ、呂み尔	↓こ、路み丹	↓こ、呂み丹
10、とふ事尔	↓とふ事有	↓とふ事有
11、好といへ里	↓好といへ利	↓好といへ利
13、愛・といへ里	↓愛・といへ利	↓愛・といへ利
16、君子ハ	↓君子盤	↓君子盤
		11

18、可感丹や	↓可感丹や	↓可感丹や	13
19、書はと徒て	↓書はとつて	↓書はとつて	13
20、風雅ハ	↓風雅盤	↓風雅盤	14
22、見流所ル	↓見流所丹	↓見留所丹	17
25、衆丹さかひて	↓衆丹さかひて	↓衆丹さかひて	19
28、かりそ免ル	↓かりそ免丹	↓かりそ免丹	21
29、たハふ連	↓た者ふ礼	↓た者ふ連	22
31、歌ニ實あり	↓歌丹實あり	↓歌丹實あり	25
33、ミことは越	↓ミことはを	↓ミことはを	27
37、求た流所	↓求たる所	↓求堂所 <sup>4</sup>	30
39、筆濃道・も	↓筆の道ルも	↓筆の道も <sup>4</sup>	32
41、柴門の外耳	↓柴門の外丹	↓柴門の外丹	34

次にその「丹」を除くと、16・20の「ハ↓盤」は汎用仮名の「ハ」を係助詞「は」専用仮名「盤」に改めたもの、11・13の「里↓利」、6の「武↓無」、19の「徒↓川」、22の「流↓留」、33の「越↓遠」は、異体仮名を基本仮名に書き換えたものである。いずれも標準的な仮名文字遣いに変わったことを意味する（表六）。ちなみに癸酉記行版の「丹」は森川許六が進んで書き変えたものの、柿衛本の「丹」は、同書の筆者が「丹」を多用する書き癖を持つ人物だったことに依る。つまり、この類似は両書の筆者の文字の嗜好が一致したせいではある。

表六、柿衛本が癸酉記行版と一致する表記（「丹」を除く）

韻塞版	癸酉記行版	柿衛本
6、おし武	↓おし無	↓を <sup>お</sup> し無
10、とふ事あ李	↓とふ事有	↓とふ事有
11、好といへ里	↓好といへ利	↓好といへ利
13、愛・といへ里	↓愛・といへ利	↓愛すといへ利
16、君子ハ	↓君子盤	↓君子盤
		11

19、書はと徒て	↓書はとつて	↓書はとつて	13
20、風雅ハ	↓風雅盤	↓風雅盤	14
22、見流所ル	↓見流所丹	↓見留所丹	17
29、たハふ連	↓た者ふ礼	↓た者ふ連	22
33、ミことは越	↓ミことはを	↓ミことはを	27
37、求た流所	↓求たる所	↓求堂所 <sup>4</sup>	30
39、筆濃道・も	↓筆の道ルも	↓筆の道も <sup>4</sup>	32

では、この韻塞版が江戸出発時に松尾芭蕉が森川許六に約束した修訂版「許六離別詞」だった可能性はないか。（韻塞版↓癸酉記行↓柿衛本の順に配列する。）

4 画の為 ↓ 繪の為 ↓ 畫の為

5 何・為愛すや ↓ 何の為愛すや ↓ 何の為愛すや

6 画の為愛・と ↓ 繪の為愛すと ↓ 畫の為愛すと

7 用一なる事 ↓ 用ひとつなる事 ↓ 用一なる事

12 筆の道・も見え ↓ 筆の道にも見え ↓ 筆の道に見え

右の通り、どちらかと言えば韻塞版よりは、癸酉記行版の方が字句や文字遣いが整理、統一されている。したがって松尾芭蕉が森川許六から届けられた癸酉記行版を下敷きにして韻塞版を執筆した可能性は少ない。では癸酉記行版を下敷きにして柿衛本が書かれる可能性はないか。その場合なら両書の字句が近似することに不思議さはないが、4、6、7のような許六による漢字の修正が踏襲されていない。また綺麗に清書し落款を捺した「許六離別詞」を見たら、草稿だ、訂正するという芭蕉の言葉が鵜呑みにすることはできない。さらにもし事実そうなら、この柿衛本は彦根の森川許六に送付されて『韻塞』の掉尾を飾ったに相違ない。しかし森川許六が実際に掲載したのは韻塞版（初稿本）であるため、許六は修正を希望せず、修訂版「許六離別詞」は許六に送付されなかつ

た事になる。つまり柿衛本は、どうやら松尾芭蕉と森川許六との贈答関係から生み出された文書ではないのである。

では柿衛本「許六離別詞」はいつ、いかなる事情で書かれたのか。

## 五 筆跡のくずし差、運筆差

さて中尾本下地本文に集中する「す（春）・と（登）・に（丹）・る（流）」のくずし、筆運びに注意すると、そこに正書体の文字の輪郭をすばやく再現する速筆筆写型の筆運びが認められる（本論、中）。正書体、正書式の文字列を速筆ですばやく書き上げてゆく時に生じる略筆の筆運びである。さっさと筆を運ぶために、縦棒終筆部の筆の押さえ、跳ね上げから、次の横棒起筆部の筆の打ち込みに至る筆運びに省筆の痕跡が残る。実際、中尾本の「す（春）・と（登）・に（丹）・る（流）」からは、これら速筆型の筆運びに見る省筆の痕跡が見付かっている。

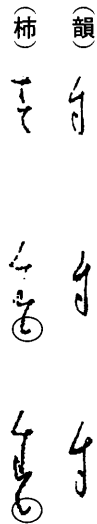
これを具体的に言えば、中尾本『おくの細道』の「す（春）」の特徴は、左記のような略筆の跳ね上げ（○印）に現れる。（①は中尾本、②は中尾本、③は猿蓑版幻住庵記。）

図1 ①の「春」 図1 ②の「春」 図1 ③の「春」



この中尾本『おくの細道』の「す（春）」の特徴は、次の図Aの通り韻塞版には無く、柿衛本にのみ残されている。

図A 「す（春）」（右、韻塞版、左、柿衛本）



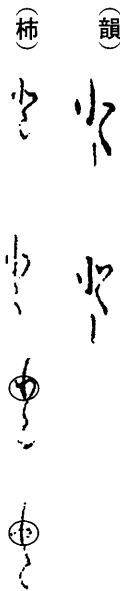
同じく中尾本『おくの細道』に頻出する「と（登）」の特徴は次の通り、第一画終筆部の筆の跳ね上げにある。（①は中尾本、②は三日月日記、③は幻住庵記。）

図2 ①の「登」 図2 ②の「登」 図2 ③の「登」



この「中尾本」の「登」の特徴が次の図Bの通り韻塞版の「登」には見当たらず、柿衛本の「登」には残っている（下の二文字）。

図B 「と（登）」（右、韻塞版、左、柿衛本）



同じく中尾本『おくの細道』に頻出する「に（丹）」の特徴は、次の通り、第一画の終筆から第二画の起筆に至る筆運びにある。（①は中尾本、②は三日月日記、③は幻住庵記。）

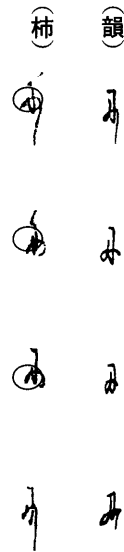
図3 ①の「丹」 図3 ②の「丹」 図3 ③の「丹」





この「中尾本」の「丹」の筆運びの特徴は、次の図Cの通り韻塞版の「丹」には残らず、柿衛本の「丹」には頻繁に現れている。

図C「に（丹）」（右、韻塞版、左、柿衛版）



同じく中尾本『おくの細道』に頻出する「る（流）」の特徴は、次の○印の箇所の筆運びにある。（①は中尾本、②は幻住庵記、③は三日月日記。）

図4①の「流」



図4②の「流」

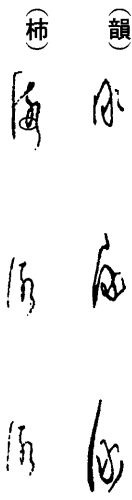


図4③の「流」



そしてその「流」の筆運びは、図Dの通り韻塞版の「流」には見えない。一方、字形の上では中尾本に近い柿衛版の「流」は、第三画縦棒の打ち込みから第四画横棒の打ち込みまでを大胆に省略する点で、図4②の「幻住庵記」に似ている。つまり柿衛版の「流」は中尾本『おくの細道』の「流」よりはいいそうくだけた筆運びで書かれているのである。

図D「る（流）」（右、韻塞版、左、柿衛版）



以上、中尾本『おくの細道』の特徴である「春・登・丹・流」の用字、修辭、字体、くずし、運筆を尺度として、「許六離別詞」の文字・表記を検証すると、柿衛本「許六離別詞」の異体仮名には「中尾本」筆者に近似した一貫した個性が検出されるが、韻塞版「許六離別詞」のそれには同じ個性は検出されない。また柿衛本「許六離別詞」の「流」に見るように、同書の文字遣いには中尾本の筆跡よりもさらに芭蕉自身の筆跡に接近した形跡がある。

この検討結果から見て、韻塞版「許六離別詞」と柿衛本「許六離別詞」とは、やはり別人の手になる文書と判断される。また、同じ理由で、柿衛本「許六離別詞」は作爲的に芭蕉の筆跡を真似る偽筆ではないと判断される。原本に似せて筆者の個性を隠すことを旨とする偽筆では、用字特性、修辭特性以下一貫して現れる特徴標識は残らないものだからである。つまり中尾本『おくの細道』の筆者は筆跡が芭蕉に似ることを尊ぶにしても、乖離することを恐れる意識は希薄な人物なのである。

## 〈結〉六 祐筆の登場

結論から言えば、柿衛本「許六離別詞」の筆跡は中尾本『おくの細道』の筆跡と極めて近い。しかし、森川許六が松尾芭蕉から授与された芭蕉自筆版を模刻した韻塞版「許六離別詞」の文字とは一致しない。また韻塞版「許六離別詞」の文字・表記、署名の「風羅坊芭蕉述」、「風羅」[鳳尾]の落款から見て、柿衛本「許六離別詞」は韻塞版の下敷きになった松尾芭蕉の直筆ではない。

この柿衛本の筆者名は、いまだ特定されてはいない。しかし幸いなことに元禄六年四月以後、松尾芭蕉に近侍して森川許六から到来した私信

を開示して貰える人物は限られている。まず結核で病床にある甥の桃印は除外される。何本に依らず「許六離別詞」は、桃印の死後に芭蕉から許六に授与されたからである。

この桃印の闘病生活が終わった元禄六年初夏、疲労困憊した松尾芭蕉は文字通りに静養を要していた。この年の仲冬に至っても、松尾芭蕉は「残生暑中甚暑に痛候而、頃日まで絶所縁初秋閑閑、病閑保養かゝづらひ筆をもとらず候」（荊口宛、元禄六年十一月八日付）と書いている。察するに、この静養は旧暦四月から十一月まで延引したものと見える。

その旧暦十一月、恐らく桃印に引き続いて松尾芭蕉を介護することになった桃印の妻寿貞は、しかし芭蕉と前後して病体となる。その子、二郎兵衛（注1）、まさ、おふう、甥の猪兵衛、そして芭蕉自身にも結核感染の恐れが生じていた。結核で死亡した桃印の薬代で借金を残したまま静養する松尾芭蕉には、更なる薬代の心配が重なった。句会への出席と詩句の添削、贈答用句文の制作だけが収入源だった松尾芭蕉が長期に静養するととなると、彼には代筆者（祐筆）が欠かせない。元禄七年に執筆された素龍本『奥の細道』、その素龍本の手本になった天理本『おくのほそ道』が代筆であることは偶然ではない。先の柿衛本「許六離別詞」の料紙に見るとおり、これは美しい贈答品として制作されている。ちなみにこの時期の書簡には、森川許六が松尾芭蕉に贈った贈答品制作用の「唐紙地」「石摺り大色紙四枚」が記録されている（元禄五年十二月二十八日付、元禄六年十月五日付、芭蕉宛許六書簡）

この時期、松尾芭蕉に近侍した寿貞、その子二郎兵衛、伊兵衛（又は猪兵衛）、天野桃隣などがその常務の代筆（祐筆）の候補者となる。例えば元禄四年十一月以後、芭蕉の膝下で俳諧修行に取りかかっていた桃

隣（天野藤太夫、伊賀上野出身、通称勘兵衛）には、発句の添削を代理し、その点料を芭蕉から受け取った記録がある（元禄五年十二月二十三日付、此筋・千川宛芭蕉書簡）。またその著書『陸奥衛』（元禄十年刊）

に照らすと、桃隣には『おくのほそ道』を熟読した形跡があり、しかもその引用箇所は、微少ながら中尾本『おくの細道』下地本文の痕跡を止める（注10）。すなわちこれは芭蕉に近侍していた近親者が芭蕉の筆記を代理し、中尾本『おくの細道』を披見していた証拠である（注11）。

だがその氏名の特定以上に重要なことは、中尾本『おくの細道』の出現によって『おくのほそ道』制作における筆記者（祐筆）の存在が僅かに見えてきたことではあるまいか。

元禄四年十月二十九日、日本橋橋町の彦右衛門方（借家）に旅装を解いて江戸暮らしを始める松尾芭蕉が種々書き入れを終え、表記を整えた『おくのほそ道』第一稿を近侍する祐筆に手渡すのは、早くても元禄五年のことだろう。それを受け取った祐筆の手で書写されたテキストが中尾本下地本文である。そして、このとき松尾芭蕉の手許にはオリジナル『奥の細道』第一稿と、中尾本下地本文という二冊の『奥の細道』が残ったことになる。

ちなみに、さらに推敲を続ける松尾芭蕉は、このとき制作した二冊の『奥の細道』の中から自己のオリジナルを選んで、さらなる推敲のための下敷きとした。この推敲作業によって、中尾本貼り紙本文（第二清書本）のための訂正版『奥の細道』（第二稿）が準備されるのである（注12）。

この時、制作された貼り紙本文は、実は下地本文とよく似た書式のテキストを踏襲しながら訂正されたと推測される。張り紙訂正で使われた張り紙上行間隔を極端に変えるような大きなスペースの増減がほとんど無いからである（注13）。丁の境を越えて訂正が続く象潟、金沢の叙述で

も、張り紙上の語句は下地本文よりもむしろ圧縮されている。また貼紙上から下地本文を透視した記録を見ても下地本文への書き入れ語句は少ない上に、その書き入れ語句が貼り紙本文の字句に直に反映されている訳ではない<sup>注15</sup>。もし一本しかない『奥の細道』第一稿（中尾本下地本文）の上に松尾芭蕉が推敲の語句を書き加えたとするなら、中尾本の張り紙修正は現状のように綺麗には仕上がらない。この時、二度目の本文訂正を依頼された祐筆は、松尾芭蕉が所持する第二稿を使って手許の下地本文に張り紙し、訂正することで、現、中尾本張り紙本文を書き上げたのである。下敷きとすべく松尾芭蕉から預かった『奥の細道』第二稿はおそらく訂正終了を待って芭蕉の手許に返却されただろう。

この元禄五年後半、返却された第二稿を受け取った松尾芭蕉は、予定どおりそこにさらに若干の書き入れを続けて、出来上がった書き入れ含みの本文をもう一度、清書すべく清書者を探し始める<sup>注16</sup>。その依頼の時期がいつかは不明だが、その清書者は池田利牛だと見なされている。越後屋の手代である池田利牛は、依頼通りに天理本『おくのほそ道』を書写すると、松尾芭蕉第二稿と天理本『おくのほそ道』とを松尾芭蕉に返却する。そこでこれを受け取った松尾芭蕉は、両書を比較して天理本『おくのほそ道』にさらに若干書き入れを追加した後に、オリジナルを第三者に引き渡す<sup>注17</sup>。実はこの時、手許に残した現天理本『おくのほそ道』を使って、松尾芭蕉はもう一度、柏木素龍（本名、全故<sup>たけもと</sup>）に定稿本『奥の細道』（現素龍本）の清書を依頼するのだが、それは小論の主題の範囲を超える後日の出来事に属する。

以上要するに、中尾本『おくの細道』の用字特性である異体仮名「春・登・丹・流」を抽出し、同筆と見られる柿衛本「許六離別詞」の筆跡と比較した。次にその柿衛本の語句を芭蕉直筆の写しである韻塞版「許六

離別詞」と比較し、韻塞版並びに柿衛本の用字差、修辭差、字体差、くずし差、運筆差はいずれも明らかに別人のものと判断した。ちなみにこの韻塞版にも模写者森川許六の書き癖が投影しているが、それは同時期の松尾芭蕉の筆跡を照合し比較する上では支障ないものと判断した。

# 注

注1 中尾本では張り紙の他にも注意すべき点がある。丁付けを確認すると「二十七」が重複する他、二十七丁（実際は二十八丁）以後三十一丁までの丁付けがない。この二十七丁（実際は二十八丁）以後三十一丁までの区間には張り紙も少なく、料紙全体が書き直された可能性がある。その見込みに立つ場合は、ここに掲出した張り紙上の用例数は若干増えることになるが、その場合もここに提出した結論に変わりはない。

注2 「仮名揺らぎ」は筆者の造語である。詳しくは拙稿「『仮名文字の揺らぎ』について」（『日本文学』平成十七年八月号）参照。

注3 「元禄四辛未歳八月上旬 京寺町五条橋詰上ル町 山岡一兵衛」刊。

注4 『おくのほそ道』の本文研究―古典教育の視座から―（藤原マリコ著新典社、平成十三年刊73頁）による。『奥の細道』の諸本では、「きこゆ」の他に、「見ゆ」の未然形・連用形「見え」、「すゆ（据ゆ）」の未然形・連用形は「すえ」とある。ヤ行活用動詞における「え↓へ」の混用を訂正する規範意識が明瞭である一方、「かゝえ」「付かえ」「くはえ」「こゝえ」「ふみたがえ」「申伝え」など、ア行活用動詞では「え↑へ」の異同が放置されている。ア行活用動詞とハ行活用動詞とが明確に識別されなかった結果だろう。なお一般にもこの種の動詞で「へ↑え」の混用が進んでいたことは、『初心仮名遣』（元禄四年刊）によって確認される。

注5 このとき松尾芭蕉の代理を務めた「次郎兵衛」は、松尾芭蕉の同居者「寿貞」の子で、元禄六年当時、ほぼ青年に達していた男子だという（校

本芭蕉全集 第八巻書簡編「三三二頁」。

注 6 『芭蕉全図譜』『許六離別詞解説』には、『癸酉記行』『許六離別詞』の下書きとの見解が示されている。

注 7 韻塞版と柿衛本との比較

表 1 韻塞版と柿衛本との比較

	韻塞版	癸酉記行	柿衛本
1	画を好 <sup>△</sup>	↓画を好む	↓画を好
2	別をおしむ	↓別をおしむ	↓別ををしむ
3	とふ事あり	↓とふ事有	↓とふ事有
4	画の為	↓繪の為	↓畫の為
5	何・為愛すや	↓何の為愛すや	↓何の為愛すや
6	画の為愛・と	↓繪の為愛すと	↓畫の為愛すと
7	用一なる事	↓用ひとつなる事	↓用一なる事
8	精神徹に入	↓精神徹に入	↓精神妙に入
9	冬扇のごし	↓冬扇のごとし	↓冬扇のご登し
10	ミことは越	↓ミことはを	↓ミことはを
11	うしなふる事	↓うしなふる事	↓うしなふ事
12	筆の道・も見え	↓筆の道にも見え	↓筆の道に見え
13	風羅坊芭蕉述	↓風羅坊芭蕉述	↓風羅坊芭蕉

注 8 「に（丹）」については、曾良本『おくのほそ道』の使用率は四％（一例）

だが、近年、松尾芭蕉筆とされた『三日月日記』では二〇％程度に増加する。このため中尾本『おくの細道』で大量に使われる「に（丹）」の二〇％程度は、松尾芭蕉のオリジナルテキスト（『奥の細道』第一稿）に書かれていた可能性がある。

注 9 『校本芭蕉全集第八巻』解説。元禄七年夏、江戸を出立する松尾芭蕉はこの二郎兵衛を同道する事で母子の隔離を計っている。

注 10 今栄蔵著『芭蕉研究の諸問題』笠間書院、6頁。

注 11 同時期に一時、芭蕉庵の食客となった各務支考、浜田珍碩は筆跡の点で筆者からは除外される。

注 12 中尾本「象潟」の段の貼り紙の裏には「飯塚」の詞章が書かれており、初稿・二稿の存在を裏付ける証拠となる。なお、この二種の本文の語句には格段の差異があるため、別個の本文とする必要がある。

注 13 芭蕉自筆本として記録上知られている「野坡本」（芭蕉三十三回忌追善集『放生日』野坡編、享保十一年刊）には「芭蕉翁真蹟／墨附三十二葉」とあり、現状の中尾本とほとんど変わらないフォーマットであったことが予想される。

注 14 『芭蕉自筆「奥の細道」』（岩波書店刊）P75からP109には張り紙下に隠れた下地本文が紹介されているので、これによって判断した。

注 15 天理本の成立については、桜井武次郎氏は元禄六年五月に彦根に帰藩した森川許六の『許六集』『旅懷狂賦』（元禄六年五月十五日奥）に『奥の細道』関連の記事がある事を根拠にして、この時期にすでに草稿が成立していたとする（『連歌俳諧研究』四一、昭和四十六年九月）。

一方、今栄蔵氏は、同時期、桃印の看病に疲労困憊していた芭蕉に『奥の細道』の執筆は困難だと、元禄六年初秋から初冬の頃を想定している（『連歌俳諧研究』九五、平成十年八月）。なお天理本の清書者は従来、曾良だとされていたが、上野洋三氏は『すみだはら』選者の一人、利牛だという（『芭蕉自筆「奥の細道」の謎』）。

注 16 芭蕉自筆本として知られている「野坡本」（芭蕉三十三回忌追善集『放生日』野坡編、享保十一年刊）はこの松尾芭蕉の『奥の細道』第二稿で、それはこのとき野坡によって購入されたものと推測している。

ちなみに桜井武次郎氏はこの中尾本を「野坡本」と特定している（『芭蕉自筆「奥の細道」』（岩波書店刊）116頁）。